○各グループからの主な意見

学力・学習意欲の向上

○これらの学力差の要因としては、家庭の貧困がある。また保護者との関わりも大きな原因と考える。
○国語の「書く力」が不足している。学校司書を置き、「書く力」をつける努力をしている。
○学力の課題としては、書く・読む力がないこと。また基礎・基本は身に付いてきているが、応用力が弱いことがある。
○学力差などの原因は児童数の違いによるもの。特に過疎地域では児童数が少ないため、年による差が激しい。
○全国上位県に学ぶことが必要。福井県では、同じことを繰り返すことで身につけている。運動能力も同じ話で、そこに学ぶことが必要である。
○「書くこと」への意欲に課題があると思うため、意図的に感想文を書かせる。
○学習意欲向上については、子どもの興味・関心を高める工夫が必要。教材の提供など、今以上の工夫が必要である。
○学力面の課題は、各町でそれぞれ違う。学校の中でもそれぞれ課題が異なる。
○学校規模の小さなところだと、小学校から９年間そのまま進学していくので、切磋琢磨できない。学習意欲にも影響がある。
○少人数という課題があり、学力が低位にある子どもへの支援が大切である。
○宿題については、家庭学習が大切。外部から指導助言をいただいて、家庭学習の手引きを作成している。
○学力向上につながるよう、教委ができるだけバックアップしていく。

規範意識の向上

○挨拶ができる子どもを育てる。
○大人が挨拶できていないと、子どももできていない。
○県でも早寝早起き朝ごはんの励行を推進しているが、一つの視点として大事。
○規範意識については、子どもだけでなく大人の生き方、在り方が大きい。

就学前教育

○就学前の行政の取組については、保育園、幼稚園等に対して何かできることを見出し、ベースの部分を作り上げていく必要がある。
○小から中への移行にかかるギャップ、幼稚園、保育園等から小への移行にかかるギャップの問題について、就学前から切れ目なく進める。
○すべてのことが挨拶から始まると思う。就学前にそのルーツがあるのではないか。

家庭教育

○家でのテレビゲームの時間が長く、学習時間が少ない。

○宿題をする割合が少ないのは、家庭教育が充実していないからではないか。パンフレットを配布するなどしてはどうか。
○家庭・地域の教育力を高めていくことが必要である。
○家庭の経済状況については、要保護、準要保護との関係もあるのではないか。市町村の大綱でもそこまで言及する必要がある。
○貧困と低学力の連鎖が課題である。小・中だけでなく、就学前教育に力を注いでいくことが大切。

教員の資質向上

○共通の認識として、教員年齢の二極化が進む中、ベテランが若手を啓発していくことが大切。それは、校種や教科の垣根を越えて、研修等で対応していく必要がある。
○教員は多忙なため、教委が学校に出向いて研修を行うことも考える必要がある。県の出前研修も有効。
○教員の研修については、校種を超えていく必要がある。
○教員の資質の問題は、資質向上のために行政が支援していくことが大切。魅せる教員を育てる必要がある。
○学力を測る手段はあるのに、先生の力を測る手法はあるのか。

その他

○小中の連携教育が大切である。小１や中１へのスムーズな移行も進めていく。
○少規模校のメリットとして、学習環境にめぐまれている。学び合う環境がある。教員と子どもの距離が近いので能力を伸ばしやすい。
○デメリットとして、受け身の教育をどうするか。小さい頃から同じメンバーで枠を越えられない。競争心が芽生えにくい。
○取組としては、テレビ会議（システムを活用した学校間交流学習）が大変効果的であり、学ぶ意欲が高まっている。教育の幅ができ、刺激になるので、先生にもプラスになるのではないか。
○不登校の問題は、各教育委員会が先生との連絡会をもつことが必要。
○へき地教育の原点として、複式の問題がある。
○難しさはあるが、地域の人材は豊富である。自然、歴史や文化、校種間で連携できることがへき地の素晴らしさである。
○調査結果には一喜一憂せず、教育における不易を大事にしたい。
○大人が精一杯がんばっている様子を見せることが大切。

＜総　括＞

○学校が楽しいということは、まず、授業が楽しいということだと考えている。
○教員の年齢が二極化して、ベテランのスキルを若手にどう継承していくかが大事。
○先生の力をどう測るのか、「教師が学ぶ手法とは」という提起もいただいた。
教員の資質向上に関わることは教育研究所を中心に進めて参りたい。

○「（アンケート調査等による）子どもの声が真実」という前提で取り組んでいく。
○調査結果は我々が試験を受けた結果とも言える。我々には傾向と対策を考える責任がある。
○パフォーマンス（結果）は、地区の特徴を反映するということを前提に調査する必要がある。
○統計結果は、地区の教育に原因があるのではないか。統計結果には継続性がある。児童は毎年替わる。真っ白な状態で入ってくるのを地区の教え方で染めてしまう。我々の責任が大きい。
○挨拶の差については、先生の挨拶の調査がない。先生の挨拶量と生徒の挨拶量は、関連しているのではないか。先生の調査をする必要がある。
○生活規律に関してだが、奈良の人たちは平均的に夜遅くまで起きている。家庭での生活は教育にも反映してくるので、調査が必要である。
○学力の差は、教え方の差である。先生の情熱や工夫でカバーしてもらっているが、もう少し、教育の要綱を整えたい。考える教え方は、競争心を植え付ける教え方は、学習指導要領に入っているのか疑問である。教え方の工夫は我々の工夫の対象である。
○学力格差の原因を調べて、どうすればいいのか考える必要がある。例えば「挨拶をするには」など。目標を掲げないといけない。挨拶させるには、まず先生が挨拶するんだということを教育振興大綱の大きな目標にすべきかどうかも議論する必要がある。
○学習を好きにさせることが、学力を伸ばす基本の第１歩。学習を好きにさせるにはどうするのか。教育振興大綱（策定中）にはまだ入っていない。考えることを好きにさせるにはどうすればよいのか。
○考える力をどう付けさせるのかについて、先生はどうすればいいのか。今日の調査では未だ出てきていない。それは先生への行動調査で、ちゃんと教えてるかを調査すればただちにわかる面もある。先生がすべきモデルやルールをどこかで確立しないと先生の資質が伸びない。
○この成績表（資料３）は、生徒の成績表ではなく、実はそれぞれの教育委員会や先生の成績表でもある。各論になるが、教師の育て方をどうすればいいか。育人とあるが、生徒の育て方は教師の育て方から始める。教え方をどう指導すればよいか。これは教育委員会の課題である。
○県立高校になると、県教育委員会と我々が話する。小・中の指導はそれぞれの市町村の教育委員会の責任なので、もう少し対話を深めないと、小・中のレベルは上がらない。先生の教育指導水準はあがらない。
○さらに、就学前教育の話が大事だという意見が出ていた。私立は県、公立は市町村、保育、幼稚園ということになっている。就学前教育をどうするかというのは県と市町村との共同の課題になっている。小１ショックは就学前教育を受けているかどうかと、所得の格差、保育の負担などが関係しており、今後向き合っていく必要がある。
○家庭教育について、教育現場の我々が、家庭のせいにしないことが基本である。

家庭がどうあっても教育で回復するんだという情熱がないと我々の責任は果たせない。家庭での教育（家庭教育の手引き）を配られるということだが、学習の体制や生活規律、規範意識を学ぶようなものになっているか。もう少し勉強したい。

以　上